

発行：(福) 十字の園本部事務局
理事長 平井 章

住所：〒431-1304
静岡県浜松市北区細江町中川7220-11
tel 053-436-9535
fax 053-437-1352

社会福祉法人 十字の園

ぶどうの木

(ヨハネ福音書 15章)



「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。」

(ローマの信徒への手紙 15 章 1 節～ 2 節)

ケアハウス アドナイ館 施設長 宮岸 孝一



今から 27 年前のクリスマス、私たち家族は御殿場十字の園の園長室で鈴木生二理事長の採用面接を受けていました。当時私たち家族は富士市にある製紙会社に勤務しており、子供も既に三人居りましたが長男が喘息の公害認定を受けるほどの病気との闘いの中に在って、治療と療養を兼ねた転職先を真剣に求め、考え悩み苦しみの時、祈りに応えるように伊東市 (伊豆高原) に特別養護老人ホームが建設中で職員を募集していることを伊東教会から富士市吉原教会に打診があったのです。

あの苦難の中で、私に与えられた聖書の箇所が「ローマの信徒への手紙 15 章 1 節～ 2 節」のみ言でした。(私たち健康で強さを誇りがちな人間は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分だけの満足を求めるものではない) と私は自分の子供をとおして改めて知らされた思いです。

採用の結果を、鈴木生二理事長からいただいた 1981 年は国際障害者年の幕開けの年でもあり、老人介護の知識も何もない私が、今こうして福祉の道に繋がって来れたことは聖書のみことばの導きと今は亡き長男が与えてくれた賜物によるものと感謝しています。

林 富美子先生（御殿場十字の園初代医師）を偲ぶ

『老人の話に耳を傾け、老人の心の整理を援助すること』

理事長 平井 章

林富美子先生は東京女子医学専門学校を卒業後、国立癩療養所多摩全生園を皮切りに、その半生をハンセン氏病治療に従事され、1971（昭和46）年より、御殿場十字の園の医師として約10年間働かれました。100歳になる1か月前の今年9月12日に天に召されました。社会福祉に携わってきた私自身も多くのことを林先生から教えていただきました。林先生を偲びつつ、福祉への姿勢、心を記録に留めておきたいと思います。

私的な思い出を話しますと、私が御殿場の事務を担当していた時に、職員たちで「宝夢倶楽部」を作りました。宝くじを買うというクラブです。老人ホームの「ホーム」と宝くじを買って夢を見るの「宝夢」をもじったものです。年末宝くじで銘々に夢を見てもらうという方法で、林先生も私から3枚購入しました。大晦日の発表で購入したうちの1枚に何と100万円が当選していたのです。誰の分が当たったのか気になり、職員たちに声をかけましたのですが見つかりません。ある日、林先生がそっと私に宝くじを見せてくれました。100万円の当選くじでした。そのお金は韓国の救癩事業への献金に用いられましたようです。

林先生が土田セイさんと出された特養寮母の看護絵日記『夕暮になっても光はある』の表紙に登場したアヒルの話です。施設に潤いをと、先生はアヒルを買ってきました。同僚職員と一緒に中庭にアヒルのための池をつくり、世話をしました。ミミズで餌付けをして、南庭でのアヒルの行進などもしてお年寄りに喜んでもらいました。その本の巻頭に「高度の老人看護、老人介護の原点は、とりもなおさず、この老人の話に耳を傾け、老人の心の整理を援助することなのだとしみじみ思います。」と記されています。林先生からの大切なメッセージです。

御殿場で一緒に働いた鈴木フミ氏は、『林先生は、とてもお年寄りを大事にされ、よく声をかけられました。お年寄りには、とにかく先生に診てもらいたい、声をかけてもらいたいで、こっちを診察していると、他の人が声をかける。

身体の具合が悪いわけではないのに、聞いてほしいのです。「まず耳をもってお年寄りのことを聞くこと」、それによってお年寄りの心のお手伝いをしていくことだったのですね。』と話しています。先生の白衣のポケットにはいつも飴玉が入っています。回診をしながら、ポケットの中からお年寄りの口に飴玉を差し上げていたとのことを聞きました。



「野に咲くベロニカ」は、先生の自叙伝の本です。その本には、「神山復生病院の医師であったときに、ある老人ホームからハンセン氏病の疑いで検診の依頼があった。診察すると右上腕の皮膚癌であった。ところが園長はハンセン氏病患者として入院させれば事が円満に納まるからと懇願する。先生は、この老人にハンセン氏病と診断を下すことに良心が承知しないと、村の診療所に老人のベッドをと手を尽くし、準備ができて連絡したところ、老人は既に亡くなっていた。」という内容が記されています。先生にとって辛い思いをした事件であったのでしょう。それから間もない頃に、十字の園からの特別養護老人ホームの医師の話があり、その要請に応えていただいたという経緯がありました。

また、林先生はお母様の介護を数年間、家族ぐるみでされた体験があります。そこには、母への愛情があり、尊敬し大切に介護する家族の姿があります。また、介護する者たちの困難さ、大変さを身にしみ感じておられたようです。お年寄りへの優しい眼差し、家族への思いやり、そして職員たちへのいたわりの心は、そのような歩みの中から生み出されたものでしょう。

「歩」の存在価値

浜松市社会福祉協議会 理事 中村 準志

子供のころ縁台将棋の中で「歩の無い将棋は負け将棋」と云うことを教えられてきました。その本当の意味を正しくは知りませんが、「歩」のように吹けば飛ぶような軽い存在の駒であっても、それなりに大事な役割を担っているもので、粗末にははいけないとの教訓でしょう。

この類のことわざは、将棋の世界だけではありません。「一元を囓^{わら}う者一元に泣く」などなど、小さな存在のもの、弱いものをいたわり大切にする「心」は、先人から教え伝えられているものが数多くあります。にも関わらず、この頃の世の中どうでしょうか。

世の中の進化に連れて、「歩」は切り捨てられ、「一元」は無視される傾向がますます強まって行く様に思えてなりません。本来ならみんなで助け合い支えあはずの地域の状況が、構造的に成り立たなくなっているのでしょう。

細江地域でも中堅的な事業所や老舗の商店が、相次いで廃業したり店を閉じたこの数年の流れは、街の人たちには大変なショックで、その厳しい現実を改めて実感せざるを得ない状況です。

昔は良かった、と思う昔人にとっては、本当に寂しきかぎりです。なんでこんな世になったのか検証が必要と思います。「歩」の存在価値、大切さが忘れ去られていくように思えてなりません。構造改革の名のもとに推進された革命的施策が正しかったのか、考えさせられます。無駄を省き、非生産的なものを除く施策の推進を否定はしませんが、世の中、無駄の積み重ねが人の世の常と思えば、もう少し「歩」の存在を評価した、思いやり施策を望みたいところです。



オリブが障害者自立支援法に移行して

松崎十字の園 施設長 三條洋二

障害者自立支援法は、サービスの提供主体を市町に一元化し障害の種類にかかわらず障害者の自立支援をする事などを目的とした制度で施設は、平成23年度までに移行をすればよいことになっていました。しかし身体障害者療護施設オリブは、併設をしている障害者デイサービス「空とぶうさぎ」が平成18年度10月でその制度がなくなり自立支援法上の制度に変わらなくては利用者の日中の生活の場が無くなってしまふという事になってしまいました。そこで本体の療護施設も新制度の生活介護という制度に移行する事で、施設利用者とデイ利用者25名が日中の生活をする体制になりました。本来ならば平均障害程度区分から算出される報酬と人員配置で新制度の移行時期を考えるべきですがデイの利用者に行き場の確保を重点に考えての移行でありました。

19年度4月の移行により、生活介護サービス費Ⅳというランクで、報酬が今までに比べ月で30万円の減収、人員配置は2:1の配置から3:1の配置になり-1名の職員数で利用者の生活を御世話することになりました。新制度に移行をして利用者の生活は、いろいろと変化をしております。例えば、職員数が減ったなかで入浴の回数や外出の機会の見直しが行われたり、経過措置での入所と判定をされた利用者については、本人も在宅生活を希望されている中で在宅復帰への取り組みも考えなければ行けません。また将来、入退所者があった際、平均障害程度区分が変化する事が考えられ、それに対する人員の対応も考えていかねばなりません。同時に自立支援法が障害の種類にかかわらず支援をするという点で身体障害以外の障害に対しても受け入れができるような職員にスキルアップを日頃から考えていく必要があります。この数年で様々に見直されてきた障害者の制度ですが、それに翻弄される事無く人権と義務という視点を見失う事のないように利用者と共に歩んで行きたいと思っています。



2007年十字の園大会報告

今年も無事に「十字の園大会」が終了致しました。今年のテーマは「その人らしく生きることを支えるケアとは... 地域」でありました。

基調講演では阿部志郎氏（横須賀基督教社会館 館長）をお迎えし、「弱さを担う ～新しい文化を拓く～」という演題で講演していただきました。講演の中で「人生は三つの時期に分けられる」ということを話され、「愛」について考えさせられました。

課題講演では龍尾和幸氏（青少年自立援助ホーム サポートセンター東樹 ホーム長）をお迎えし、「横に並んで希望をもって前を向いて歩く」という演題で講演していただきました。龍尾氏はご自分の人生体験をも話され、「人生の困難に立ち向かうこと」について考えさせられました。

また、十字の園各施設より7題の発表が行われ、講演やそれぞれの施設発表を通して、「その人らしく生きるとは…」 「その人を支えるケアとは…」 「地域の役割とは何か？」 深く考えさせられる講演でした。

第12回十字の園大会
十字の園における福祉の創造
～既に据えられている土台の
その人らしく生きることを支えるケアと



「弱さを担う」～新しい文化を拓く～

横須賀基督教社会館会長 阿部志郎先生

基調講演を頂いて

今回の基調講演は、今年度のテーマである「その人らしく生きることを支えるケアとは～地域～」というテーマに沿って「弱さを担う ～新しい文化を拓く～」というテーマでお話頂きました。

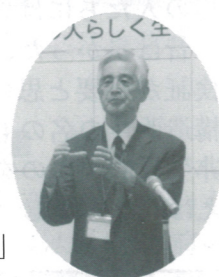
冒頭に「たらいから たらいに移る ちんぷんかんぷん」という小林一茶の句を紹介されました。最初のたらいは、「赤ちゃんの産湯であり、二番目のたらいは、死人に湯灌するものであり、かつて自分の家で生と死を迎えることが当たり前ではあったが、今日では、多くは病院でそれを迎えることが多くなっている。人間は、①いつ死ぬか、どこで死ぬのか ②施設か、病院か、自宅か ③どういう状態で死ぬのかを問い続けてきた。人生とはわからないことだらけであり、老いとは何かを人類は考え続けてきた。」とふれられ、「生から死に至る人間の一生は、不透明で不確実なことを示している。」とされました。

かつて、日本には旧来長子相続の習慣があり、女子には相続権がなかった。家を継ぐのは長男であり、墓を守る。墓がある所を故郷と呼んだ。高度成長期の担い手は次男以下であった。そこでは、体力のある子、知恵のある子が求められ、その歪としてイジメや不登校の問題が顕在化した。タイには長子意識がない。自然があり、両親が守り、地域も守ってくれる。そして何より、仏教が根付いている。』と述べられました。

「スウェーデンでは、1人の孤児に100人のボランティアがいるが、日本では、37,000人の孤児に里親が3,400人しかいない現状を踏まえると、これからの施設は、コミュニティ形成の必要性がある。」と述べられました。

次に、高齢者福祉・介護の現状にふれられ、具体的な数字を挙げながらお話していただきました。『日本の福祉の歴史を振り返ると恤救規則から始まり、救護法を制定したが、「救貧はほどほどに」という思想が根底にあり、十分ではなかった。こういう現状を踏まえ、私達は、「人が人と同じ罪人として分かち合うこと」「人を愛するということは、民族や国境を越える」ということを認識しなければならない。』と述べられ、聖隷では、長谷川保氏が全国に先駆けて、ホスピスを作り、特養を作った。と具体例を挙げられました。

最後に、『サービスの相互性として「愛したら、愛される」ということ、自立とは、その人らしく、ベストを求め歩み続けることであり、私達の役割として、それをサポートすることである。』と述べられました。締めくくりに、「私達は、立派に生きるため、立派に枯れるため、盛んにいきましょー！」と呼びかけられ、講演を終了しました。



「横に並んで希望をもって前を向いて歩く」

—その人らしく生きることを支えるケアとは…地域—

青少年自立援助ホーム サポートセンター東樹ホーム長

龍尾 和幸先生



冒頭、しむらふくみ氏の言葉を借りて、「命の色はグレー」という言葉から講演は始まりました。先生によれば、「家庭の中には、灰色の自分がある」、「グレーは否定的に捕らえがちだが、人間的なものの共通性がある。」と述べられました。

自然界に用意しているものは全て丸い。また、人間の身体も円柱であるが、福祉も含め人間が作り出すものは直線的なものが多い。直線的な価値観が多い。人間は、丸い命の中に生まれる。人間的なものにするために、○にしていかなければいけない。

現在の児童の措置システムは、「直線的であり本当に援助を必要としている人が出てこない現実がある。東樹のサイクルシステムは丸くなっている。」と述べられました。

続いて、梅原猛氏の言葉を引用し、「私は、母の供養のために、死ぬまで書き続ける。」と言われたことを紹介し、人間は、死ぬまで成長し続けることを示唆されました。

先生の生い立ちから現在にいたる人生のお話は、圧巻でした。先生の体験として、17歳で日立の溶接工となり、機械に右腕を挟まれ失ったこと。生きるべきか、死ぬべきかで考えたこと。3ヶ月の入院生活の中で、福祉で生きていこうと決意したこと。見舞いに来た人から「がんばれ」と言われたが、がんばれと言われても、「苦しんでいるというのは、がんばる方法がわからないので苦しんでいる。」のだということ。孤独感にも襲われた。また、見舞いに来た担任の先生に「どうするんだ」と問われ、「何をしたいかわからないから、苦しんでいるんだ。」と痛切に思った。そこで、「人に頑張れはいらない。側にいるだけで、人は優しくなれる。」ということを学んだ。

人を援助することは何かということ、そして、福祉施設の職員の役割は何かということについて、自らのスイスのチューリッヒでの体験を語られた。その女性職員の言葉「存在ですよ。」と言われ、衝撃を受けた。「存在」とは、「私はここにいる。話を聞こう。」ということ。そして、「楽しい」という中に「正しい」が入っている。人は、楽しいところに寄ってくる。「楽しい存在として、施設があるようにならなければならない。」「地域の中で共生する」ことが求められていると述べられました。

映画監督の小津安二郎氏が、「映画を作るには、もう一人の脚本家がいる。」「1人で作ると暴走する。」という言葉から、「良い作品は、2人で作ることによる。」という言葉で講演を締めくくられました。

このことは、私たちが普段取り組んでいるケアに対しても、示唆ある言葉でもありました。

十字の園大会プログラム

24日	開会宣言	13:00	司会 榎林直明	開会宣言
	開会礼拝	13:00~13:20	司式 野村 稔、奏楽 野崎庸子	説教「働きが益となる」
	理事長挨拶	13:20~13:30	平井 章	「～既に据えられている土台の上に～」
	基調講演	13:30~15:00	阿部志郎先生	「弱さを担う ～新しい文化を拓く～」
	課題講演	15:15~16:45	龍尾和幸先生	「横に並んで希望をもって前を向いて歩く」
25日	施設発表1	9:00~9:20	浜松十字の園	のんびりいこう ～施設から地域～
	施設発表2	9:20~9:40	御殿場十字の園	通所介護における介護予防に関する取り組み
	施設発表3	9:40~10:00	松崎オリブ	個人の生き方の選択と施設の関わり
	施設発表4	10:00~10:20	アドナイ館	いつまでも元気で生きる
	施設発表5	10:40~11:00	松崎十字の園	在宅生活継続への施設の役割とは
	施設発表6	11:00~11:20	伊豆高原十字の園	食べる喜びを生きる喜びに変えて
	施設発表7	11:20~11:40	伊東養護平和の杜	人としての尊厳を守る為に!
	閉会礼拝	11:40~11:55	司式 平井 章、奏楽 野崎庸子	奨励「わたしはわが民を救い出す」
	閉会の挨拶	11:55~12:00	宮岸孝一法人事務局長	閉会の挨拶

「大地のめぐみ 第二弾 しいたけ」

アドナイ館 三輪 真理子



2年前の第一弾“たけのこ”に続き今回は“しいたけ”です。土台になるくぬぎの木のだ木を組み、しいたけ菌の注射を打ち早や2年。気がつくと人間の顔ほどに成長したしいたけが……。

アドナイの森の奥の秘密の場所で、お日様の顔も見ないまま、人知れずりっぱに育っていたのですねー。何だかそんな“しいたけ”がいとおしくなってきましたか？しかし、そんな事は言ってられません。早速しいたけハンターが招集されました。蚊取り線香をたき、ザルをかかえ、足元に気をつけてひとつひとつ丁寧に採ります。よく太って美味しそうなものがたくさん採れました。

次は天日干しです。今までの日陰の身から一転、お日様をたっぷり浴びて味と香りがグーンとアップ。更にビタミンDも豊富になります。含まれるエリタデニンには、血圧降下作用、動脈硬化予防の働きがあります。

ほど木が朽ちるまでの数年間、秋の実りを楽しむことができます。感謝



「ふれあい広場」参加での楽しいひと時

松崎十字の園 馬場 弘



松崎十字の園デイサービスでは、毎年秋に行われる松崎町社会福祉協議会主催の「ふれあい広場」でリハビリ体操を担当することになりました。帰宅前に必ず行っている、民謡「ドンパン節」と水戸黄門の「わが人生に涙あり」の二曲に機能訓練士のアドバイスを取り入れ、肩や手、肘関節の動きをメインにしたオリジナルの体操を行いました。簡単で座ったままでも出来るので利用者さんにとっても好評です。当日は参加した自治体やお買い上げに協力して下さった方々で体育館いっぱいになり、積極的に私たちの動きを見ながら体を動かして下さいました。ドンパン体操では太鼓も加わり、わずか15分程でしたが、全員参加で楽しい時間を過ごしました。松崎十字の園にお越しの際はデイサービスに寄り、是非体操を覚えて帰ってください。

特養の方では、当日に4名の入所者も参加され、買い物やゲームなどで地域の方々と交流をされ楽しい時間を過ごされました。最後に「ふれあい広場」閉会前に行われる恒例のお餅拾いでは10個以上も拾われ満足な表情も見られたご利用者もいました。



平和の杜の中庭に慈母観音の眼差しが……

伊東市立養護老人ホーム 平和の杜 里見 敏和



11月8日、海蔵寺の富永和尚さんをお迎えして、観音様の点眼法要が行なわれました。和尚さんが、観音様の眼に筆でチョンチョンと黒い点を入れると、観音像の表情が生き活きとして、参列した入居者、デイサービスの利用者の皆さんに、優しく微笑みかけているようで、母親の優しい眼差しを感じました。

法要が終わって、ポカポカ温かい日差しの下で、そのまま芋煮会を開いて、団欒のひとときを楽しみました。

ちなみに観音様を安置する六角堂とその広場に設置する予定のテーブルやベンチ、また、周辺のガーデニングはすべて入居者の皆さんの手作りのです。平和の杜の夢が広がります。



浜名湖ガーデンパークに遠足へ！

浜松十字の園 後藤 速人

10月に秋の遠足として、お弁当をもって浜名湖ガーデンパークへ行ってきました。

朝からはりきって、わいわいがやがやと賑やかにおにぎりを作りました。行きの車の中でも皆さん楽しみで会話に花を咲かせておられました。

この日は快晴で暖かく、最高の遠足日和でした。ガーデンパークに着き、早速芝生の上でお弁当を食べ、青空の下いつもより食がすすんでいるような気がいたしました。食後は寝転んだりと思いにのんびりとした時間を過ごされました。“モネの庭”では綺麗な花々が見事に咲いており、自然と皆さんの笑顔も満開でした。遠足は毎回楽しみにされている方が多く、今後もより楽しんでいただけ最高の思い出となるように計画していこうと思います。



ある利用者との約束がとうとう守れました。

御殿場十字の園 岩田 朋宏

その約束とは「レース観戦をしよう!!」です。

その方は昔トレーラーのドライバーを職としており、自動車にとっても詳しく自動車好き。私も車バカで互いの趣味が合い、自動車の話をすると時間を忘れて没頭してしまう仲であります。F1で少し有名になった富士スピードウェイでF1より一足早い8月25日にフォーミラ日本の予選を2人で見に行ってきました。日ごろの行いと関係なく、かんかん照りの晴天。レース会場はほぼアスファルトの為、暑さが上から下からとそそぐ中で、汗だくになりながら予選を観戦。顔を近づけてもお互いの声が聞こえない程の爆音。しかしお互いになぜか笑みが…。いつもなら騒音と思える音（エンジン音）が心地よく気持ちが高ぶっていました。大きい爆音が近づくと目の前をあっという間に通り過ぎるレースカー。それを真剣にまじまじと見ている利用者。そしてエンジン音の音を聞いて、「すごい音だね。きっと時速は何百キロって出ているんだろうね。想像つかない速さだね。」と目を輝かせて話しかけてくれました。施設の中では時間を持て余して日々を生活しているように思えましたが、ここでは生き生きしている姿がありました。

レース観戦後、私の勘違いかもしれませんが、良く話しかけてくれることが増えたように思えます。また、ご家族の方や、周りの職員からその利用者がとても喜んでいたとの話を聞く事もあり、以前よりいい関係が築けるきっかけになったと感じた外出でした。



100歳のお誕生日に

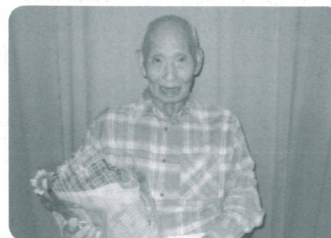
伊豆高原十字の園 杉本 まゆみ

介護保険制度開始以来、伊豆高原十字の園在宅部門で初めて満100歳を迎えた青木孝吉さんです。明治・大正・昭和・平成と幾多の時代を生き、本当にめったにない慶事ということで、歴代のヘルパーステーション主任達や居宅介護支援事業所のケアマネージャー（残念ながら来られない方もいましたが…）が一同にお祝いに駆けつけました。

一時は寝たきりとなり、命の危険もあった青木さんですが、現在では車椅子に移乗できるまで、お元気になりました。いつもは辛口の青木節も今日ばかりは返上です!!「みんな美人だぁ〜!」と最上の言葉と、好物のケーキを目の前に満面の笑み、を頂くことができました（笑）。このあったか交流は、伊豆高原十字の園の理念「あなたのために」そのものを感じた瞬間でもありました。

世間では、満100歳を過ぎると、毎年お祝いをするそうです。来年も一緒にお祝いがしたいですね。

“青木孝吉さん、満100歳おめでとうございます。”



支援のお願い

伊豆高原十字の園は社会福祉法人十字の園創立 20 周年記念事業として 1981 年 4 月に伊豆半島で初めて開設した特別養護老人ホームです。開園から 26 年がたち、多くの人たちに支えられ歩んで参りましたが、建物の老朽化はかなり進んでいます。屋上に抱えている重量のあるソーラーの撤去や防水工事を行い、大地震にも耐えられ、利用者の安全確保ができ、また、地域の被災者の受入れも可能な建物にしようと耐震工事の計画をしています。この計画の実現には多額の資金が必要となります。利用者の皆さんがより安全な環境で生活できるよう皆様方のご支援をお願いいたします。

郵便振替口座 00810-6-168180 口座名義 伊豆高原十字の園

ご希望があれば、支援のお願い（振込用紙）をお送りいたします。下記へご連絡ください。

お問い合わせ先：伊豆高原十字の園

〒413-0232 伊東市八幡野 1023-2 電話 0557-54-1613

法人次期リーダー育成研修

法人次期リーダー育成研修ステージ 1 が、9 月 13～14 日に浜松十字の園と奥浜名湖荘を会場に開催されました。初日は、前聖隷福祉事業団理事長の長谷川力氏が、「聖隷の歩みの中に生まれた十字の園」と題して、聖隷の原点と歩み、その精神について話されました。「聖なる神様の奴隷になる」ために専心された創業者長谷川保氏の足跡と信仰に倣い、十字の園で働く我々の心構えを振り返り、理念を再確認する貴重な講義でした。

（法人研修部 青木克文）



十字の園のクランツについて

11 月末（クリスマスの 4 回前の日曜日）から、ドイツではクリスマスシーズンが始まります。その期間をアドヴェント（待降節）とよびます。



アドヴェントクランツとは、第一アドヴェント（クリスマスの 4 回前の最初の日曜日）に用意するものがこのアドヴェントクランツです。クランツとは冠の意味で、その名の通り、直径 30～40 のもみの枝で出来たリースに 4 本のロウソクを立てたものです。第一アドヴェントに一本目のロウソクに灯がともされ、第二アドヴェントには 2 本目のロウソクに第三、第四と一本ずつ灯をともし、クリスマスを待ち望みます。十字の園でも天井から吊るして毎朝の礼拝に灯をともします。

あとがき

きのこで思い出しましたが、その昔、「マトンゴ」という映画を観て、子供だった私はあまりの怖さに、きのこ類は大人になるまで食べられませんでした。最近になって再びマトンゴを観ましたが、すっかり平気になっていました。もちろん、きのこ類も今では大好きです。ひとの好みや価値観は変わるもので、逆に考えればいつでも新しい人になる事ができる事でしょうか。（真）

皆様の暖かい御支援をお待ちしております!!

〒431-1304

静岡県浜松市北区細江町中川 7220-11

社会福祉法人 十字の園

理事長 平井 章

銀行振替 静岡銀行細江支店 普通 0015345